

出題のねらい

㊦は、久野愛『視覚化する味覚—食を彩る資本主義』の出題です。食べ物の「色」とはどのようなものかを述べた文章です。明解な文章ですので丁寧に文章をたどっていけば、著者の主張は理解できるはずで

す。

㊧は、17世紀に成立した仮名草子『変化(へんげ)ばなし』に収録される「うなぎ」からの出題です。

話の流れを的確に抑えるためには、基本的な古文単語の理解、正確な文章読解力が求められます。基礎的な古文単語の学習と、語釈に基づいた現代語訳を繰り返すことで、古文の理解向上を目指してください。

㊨

【解答】(50点)

問一	a 余暇	b 併合	c 陳列	d 調整	
	e 密接				(2点×5)
問二	i エ	ii イ	iii ア	iv ウ	(2点×4)
問三	① エ	② ウ	③ エ	④ イ	(3点×4)
問四	当たり前				(3点)
問五	よりおいしそうに、また自然に見える				(3点)
問六	人々がイメージする食品の「あるべき」色は、時代によって変化し、国・文化によっても異なっているから。				(6点)
問七	ア×	イ○	ウ○	エ×	(2点×4)

【解説】

問一 基本的な漢字を問う問題。毎年、漢字が必ず問われるのですから、問題集での書き取りの練習は、必須です。また、一画一画を丁寧に、明確に書くことが必要です。この点をおろそかにした結果、減点された場合もあります。

問二 接続詞を補充する問題です。論理的文章においては定番とも言える問題です。前の文(語句・段落)と後ろの文(語句・段落)との関係を確認することが必要です。それぞれの接続詞の役割を理解した上で、繰り返し練習してください。

問三 基本的な語彙の知識を問う問題です。対策としてはことわざや故事成語などの知識を増やしていくことが必要です。また、現代用語として基本的な言葉も理解しておくことが求められます。④「ユニバーサル」については、本文の読解とも関わる重要な言葉です。

問四 空欄補充の問題です。文脈に沿ってふさわしい語を補充することが求められます。ここでは、「自然な」「当たり前」「あるべき」といった「色」に関する修飾語の中から最もふさわしい語句を選ぶことが必要です。また、これらの違いが理解できていれば、全体的な読解も可能だったはずで

す。

問五 文章の読解力を問う問題です。「消費者の視覚に訴えることは、すなわち購買アピールにつながるからである」とあることから、視覚に基づく「購買アピール」について書かれた箇所を抜き出すことが求められます。

問六 文章の読解力を問う問題です。「食べ物の色は、非歴史的で地理的にユニバーサルなものではなく、特定の時代と場所にユニークな歴史的構築物として捉える必要がある」と書かれているところから、「ユニバーサル」・「ユニーク」という2つの用語を理解した上で説明することが必要です。「ユニバーサル」については問三④で出題したように「共通」を意味する言葉であり、「ユニーク」はその対義的な言葉として「独特・特異・固有」といった意味です。そのため、なぜ「食べ物の色」が「時代・場所」において「ユニーク」であるかを説明した箇所を探す必要があります。

問七 文章の読解力を問う問題です。文章を正確に理解していれば正解は導き出せるはずで

## 一般入試／国語(中期)



### 【解答】(50点)

問一	①せっしょう ②きい	(3点×2)
問二	エ	(4点)
問三	イ	(4点)
問四	イ	(4点)
問五	ウ	(4点)
問六	ウ	(4点)
問七	昇天を望んで、龍にならん	(6点)
問八	饗応	(4点)
問九	門を出たと思うと、姿が見えない	(6点)
問十	ウ	(4点)
問十一	ウ	(4点)

### 【解説】

- 問一 基本的な古文単語の読みを問う設問です。a殺生(せっしょう)は「さっしょう」と書く誤答が多かったです。b奇異(きい)の読みはたいへんよくできていました。
- 問二 時系列を押さえられているかを問う設問です。毒流しをすることになった、という前文を受けて、いよいよ明日に毒流しが決行される夜、との意味になるので、エが正解になります。「きはまりし」の「きはまる」は、「決まる」の意味の古語になります。
- 問三 古語「物語」の意味を問う設問です。毒流しをする里に現れた托鉢僧を、家主が家に呼び入れて「物語り」します。ここでの物語は「談話」の意味ですから、イが正解です。ウ「あいさつを交わしたときに」とする誤答が目立ちましたが、物語に挨拶をするという意味はありません。
- 問四 副詞「さらさら」の意味を問う設問です。「さらさら」は下に打ち消しの表現を伴って「決して」という意味になりますから、イが正解です。法師はうなぎの化身なので、川に毒流しをすることは、決して承知できることではないのです。
- 問五 品詞分解の設問です。まず、「守ら／しめ」で分けてから、それぞれの品詞の用法を考えます。「守ら」はラ行四段活用「守る」の未然形、「しめ」は後ろに「給ふ」が付くので、尊敬の助動詞「しむ」の連用形となり、ウが正解です。イの誤答が目立ちましたが、高校で学ぶラ行変格活用の動詞は「あり」「をり」「はべり」「いまそかり(いますかり)」の四つしかありませんので、不適となります。
- 問六 語句の意味を問う設問です。「つひに」は、下に打ち消しの表現を伴って「まだ一度も」という意味になりますから、ウが正解です。
- 問七 「その本意」の内容を問う抜き出し問題です。厳密には「『昇天を望んで、龍にならん』とする魚」ですので、「昇天を望んで、龍にならん」が正解です。中国の黄河にある難所(龍門)を泳ぎ登った鯉は龍になるという登龍門の故事を踏まえたものです。
- 問八 「もてなさん」の意味を問う抜き出し問題です。同じ表現の箇所を探すと、「もてなそう、と思ったが、貧乏なので饗応がなかった(もてなせなかった)」となる「饗応」が正解となります。「饗応」の意味が分からなくても、文章の流れから内容を読み取れると良いですね。「殊勝」という誤答がありましたが、「殊勝に思ってもてなそう、と思ったが」という流れなので、「殊勝」と「もてなさん」は同意にはなりません。
- 問九 現代語訳の設問です。採点ポイントは以下の通りとなります。①省略されている「(法師の)姿が」を補っている(2点)、②「思へば」と「見えず」をそれぞれ「思うと」・「見えない」と現在形で訳す(各2点)。特に、②現在形を過去形で訳す誤答が目立ちました。
- 問十 内容の理解度を問う設問です。「変化」とは、神仏・天人などが仮に人間の姿になって現われること、転じて、動物などが姿を変えて現われることを指す言葉です。本話では、姿を変えていたのは「うなぎ」でしたから、ウが正解になります。エ「法師」はうなぎが化けたものなので、不適です。
- 問十一 文学史の問題です。ウ「日本永代蔵」が正解です。1688年に出版された『日本永代蔵』は大阪を代表する作家井原西鶴による日本ではじめての経済小説といわれる浮世草子です。そのほかの選択肢について、ア「更級日記」は中古(平安時代)に菅原孝標女によって書かれた日記文学です。イ「宝物集」も中古(平安時代末)に平康頼によって書かれた仏教説話集、エ「高瀬舟」は近代(明治時代)森鷗外の作。オ「平家物語」は中世(鎌倉時代)の軍記物語です。どれも基本的な文学作品なので、しっかり覚えておきましょう。

## 【現代語訳】

いつの国守が治めていた時代のことであろうか、会津（現在の福島県会津若松市）の虚空蔵山の前を流れる川で、毒流しをなさろうということがあった。もう明日と決まった夜、その里にひとりの法師がやってきて、鉢への施しを求めた。家主が家の中に呼び入れて、色々語り合ったところ、法師が言うことには、

「お聞き申したところによると、明日、この川に毒流しをなさるといふことがある。とても納得できません。この虚空蔵山の御仏は、日本に広く知れわたった御仏で、三虚空蔵の内のひとつで、この国をお守りになっている。この川はまさに御手洗の川で、まだ一度もこの川で殺生をしたという例は聞かない。だから、この川に棲む魚も、数百年あまりを生きた魚ともなると、しだいに昇天を望んで、龍になろうとしている魚もいるにちがいない。それなのに、その望みも叶えさせなさらずに、命をおとりになりましたら、そのことは、嘆いてもやはり嘆き足りない。」と、涙を流して悲しむ。

亭主も出家の考えを受け入れ、健気なことだと思い、法師をもてなそうと思ったが、貧しくて酒食が振る舞えない。粟飯があったので与えたところ、法師は気分よさそうに食べて帰った。法師が門を出たと思うと、姿が見えない。不思議なことだと、亭主はそのことを、あちこちの人たちに話した。

夜が明けたので、様々な毒の木草を切り出して、突き叩き、揉み砕いて、例の川に流しかけたので、多くの魚が死んで川面に浮かんだ。その中に、太さ二尺まわり、長さ二間あまりのうなぎがいた。人々は皆、奇異の思いを持って、脇差しでうなぎの腹を切って開いてみたところ、粟飯があった。「さては、昨晚話した坊主はうなぎが化けたのである。」としみじみ哀れに思ったとかいうことだ。